

百代の過客

2024.11.1

いつも先のことを考えている。あくまでも予定だが、数年後に、イタリアに行こうと決めている。旅行ではあるが、長い旅行である。2か月間、60日を考えている。一度の渡伊で、90日間は滞在できる。60日あれば、おおよそイタリア中を巡ることができる。

以前は、老後のイタリア移住を考えたこともあった。だが、あれこれと思案していると、手続きや何やらで、大変そうに思えてきた。今のところ、それだけのエネルギーが出てこない。それで、イタリア滞在60日間となった。

あくまでも概算だが、経費も計算してある。出発の2年前から、60日間の行程表をつくる計画である。旅を充実させるには、予習の必要がある。そのための資料は、すでにそろっている。最新情報は、ネットの検索に頼ればよい。行動の目安としての行程はつくるが、それにこだわるつもりはない。気分的には、気の赴くままの旅にしたい。

こんなことを考えていると、少しだけ行ってみたいくなる。そうなると、旅行のハイシーズンとなってしまう、料金がかさむ。ゴールデンウィークは、気候的にはいい。だが、何だか落ち着かないような気がする。夏のお盆の時期になると、イタリアはバカンスで、レストランなど、お休みのところもある。日本ほどではないが、やはり暑い。年末年始は、寒い、わるくはない。そもそも、家人の現状を見ても、とても海外渡航が許されるようには思えない。行きたいが、あきらめる。

旅に出たい。ふと、あの一節が頭に浮かぶ。「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。」で始まるあれである。松尾芭蕉の『奥の細道』冒頭である。久しぶりに読んでみた。やはり名文である。リズムよく、読み手に迫ってくる。「そぞろ神の物につきて心を狂はせ」「道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず」とある。そこまでではないが、芭蕉の気持ちがわかるような気がする。

数年後に予定している旅は、人生において、大きなプロジェクトの一つになる。芭蕉のように、2か月も旅をしたことはない。それも異国である。以前、訪れたことはある。しかし、サラッと巡ったという感じである。今度は、その場所にとどまりたい。そして、じっくりと味わいたい。

「百代の過客」とは、永遠の旅人ということだろう。旅というのは、行きたい、行こうとしている段階がいいのだろう。出発まで、あと何年もある。長い。芭蕉は「ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸する」などの準備をした。芭蕉の気持ちがよくわかる。その情景が浮かんでくる。さて、まだまだある。何をしようか。数年も待てるだろうか。